

あいらん地区児童、生徒の
生活・環境調査

1970.3

不完全：部分のみ

大阪府立図書館



1610321695

民生局



序	2
2 アンケートから見た児童生徒の生活実態	
(1) 家庭環境と家族関係	5
(2) 家庭を中心とした生活	10
(3) 地域社会を中心とした生活	13
(4) 余暇生活	16
3 戸外における遊びの実態観察	19
4 要約	25
5 質問紙と単純集計一覧表	27

(2) 家庭を中心とした生活

1.1 雑誌と映画

この地域の子供の生活様式は、マエ・コミとの接触にどう現われているのであろうか。雑誌や週刊誌(少年サンデーなど)を、どの程度読んでいるかをみると、T.12のように、「よく読む」というものが、男で5割・女で6割になっている。「時々読む」ものを加えると、男女とも9割内外に達する。これは大阪府科学教育センターの調査(以下《センター調査》と略)における大阪市内のサンプルと比べて、やや高い数字である。すなわち後者では、マンガを「読まない」ものが17%、月に「1~3冊」が23%となっている。

これら雑誌の入手先は(T.13)、「自分で買う」ものが53%で圧倒的に多く、「友だちに借りる」ものは19%に過ぎない。これは後述の小使いの項およびT.35.36に示されるような友だちの数とも関連があるのではなからうか。

映画については、「ひと月かふた月に1回位」より多く見るというものが男女とも5割以上に達しており、とくに1割内外のものは「月に2.3回以上」みると答えている。《センター調査》の大阪市内のサンプルでは、2ヶ月に1回以上みるものは約3割(月に2回以上のものはほとんどなし)である。従ってこの地区の子供は、これと比べてかなり多く映画をみていることになる。

雑誌・映画への接触にみられるこれらの特性は、後述のこの地区の子供たちの生活時間との関係が深いと思われる。(テレビについては、2.1.を参照されたい)。

1.2 小使いとおやつ

子供たちの『小使いの額』はT.15のように、男女とも5~6割のものが1日40円以上(うち1割は100円以上)使っている。これは《センター調査》(大阪市内のサンプル)では、小学生の場合に月1,000円(日額約30円)以下のもの、中学生の場合に月1,500円(日額50円)以下のものが、それぞれ全体の9割を占めているのに比べると、かなり多く使っているといえる。

このことはT.16にみられる『おやつ』の与え方にも関係あるであろう。すなわち、おやつが「家を買ってある」と「お金をもらって買う」というものとが、ほぼ半ばする結果が表われている。

これらは、父の職業(T.3)および母の就労(T.4)にみられるような、この地区の労働形態の特性と関連するところが少なくないと考えられる。すなわち、両親が不在がちであったり、忙がしかったりする結果、「おやつ」よりも「小使い」を(多い目に)与える

ことになるものと思われる。

2.1. 生活時間

子供たちの生活時間を全面的にとらえることは、今回の限られた調査では不可能であったが、聞きえた『晩ごはんの時間』と『就寝時間』についてみる限りでも、この地区の特色がよく表われている。

すなわち、『晩ごはんの時間』はT.17の(2)のごとく、大半のものが午後6時台と7時台に集中しており、その中でも6時台が全体の半数を占め、かなり早い。これは、父親または母親が労働を終え帰宅すると、直ぐに食事をするのに合わせているためであろう。

一方、『就寝時間』(T.17の(4))の方は、小学生では午後9～11時台、中学生では10～11時台が極めて多い。とくに小学生で10時台、中学生で11時台に寝る子の多いことが認められる。これは、《センター調査》と比較して明らかに遅い。

このように、夕食がかなり早く就寝が遅いことから、その間の過ごし方が問題となろう。その間何をしていたかという問に対して、小学生では男5割・女3割が、中学生では男4割・女2割強が「テレビ(を見ていた)」とのみ答えている。これに対し、「勉強」とのみ答えているものは、小学校の男子を除き1割以下である。(T.17の(3)参照)。

また、学校が終ってから晩ごはんまで何をしていたかの問には、T.17の(1)にみるように、小学生の場合は「勉強」「テレビ」「スポーツ」の順であり、中学生の場合は「テレビ」「勉強」について「手伝(男15%・女27%)」を挙げている。ここでもテレビとの接触度が強い。

2.2. 家族との接触状況

就労形態を中心としたこの地区の特性は、子供と家族員との接触にも影響している。今回の調査ではこれを、『ふだん学校から帰った時』だれが家にいるか、および『きのうの晩ごはんは』だれと一緒に食べたか、の2点について聞いている。

まず、学校から帰ったとき「たいてい母がいる」ものは、T.18のように調査対象者の67%に過ぎない。これは、母のない世帯6.9% および父母ともない世帯1.5%の存在(T.2参照)を考慮しなければならないが、同じ形式の質問による《センター調査》と比べて低率である。後者では、小学生の場合74%・中学生の場合71%が帰宅時に、母が家にいるという結果が示されている。さらに本調査で、残りの33%のうち「母はいないが誰がいる」というものを除いた14%の子供は、帰宅しても家に「だれもいない」いわゆる「雛っ子」である。この雛っ子の出現率は、地域の特性とくに親の職業・就労形

態によって大きく異なる。《センター調査》ではつぎのような結果になっている。

“鍵つ子”出現率（大阪府科学教育センターの調査より）

	農村地域	地方都市	都市住宅地域	都市工・鉱業地域
小学生	22.3	7.7	4.5	10.2%
中学生	18.5	9.0	6.7	10.8

すなわち、農村地域を別にすればいずれも約10%以下であり、今回の調査に表われた上記数字はかなり高いものといえよう。またこの地区の場合をとくに、別のところで示すような住居の過密なことや子供たちの遊び場の少ないことなどが考え合わせなければならぬであろう。

つぎに夕食時の状況では(T.19)、「みなそろって食べた」のは全体の57%しかおらず、「父はいたが母がいなかった」もの6%、「母はいたが父はいなかった」もの26%であり、さらに「父母ともいない」ものが13%にも達している。この数字も当然、前記のような家族形態を考慮して見なければならぬ。夕食をだれととるかは家庭の人間関係・雰囲気を示す一つの目安として、しばしば使われるものであるが、これも職業や地域性によって左右されるところが大きい。《センター調査》では大阪市内のサンプルの場合ふだん家族全部そろって夕食する家は、小学生で52%、中学生で63%となっている。しかしこれは、夕食をそろって食べるか、別々に食べるかを聞いたもので、現実夕食時、父または母がいなかったことを示す上記のこの地区の数字と直接比較できない。

以上から、この地区の子供は親との接触時間がかなり短いことが伺われる。このことは子供の家庭に対する態度に影響し、ひいてはそのパーソナリティ形成にも及ぶところが少なくないと考えられる。

3.1. 家の手伝い

さきに、帰宅してから夕食までの間に「手伝い」をするものが、中学生では男15%・女27%いることをみた。父親の職業に「商業」・「製造業」の多いこと(T.3)や母親の就労の多いこと(T.4)から、いさおい子供たちが家事を手伝う機会が多くなるものと思われる。「家の用事で学校を休むこと」があるかどうかを尋ねると、T.20のごとく、「よくある」というものが、男1.5%・女2.4%あり、これに「時々ある」ものを含めると、男13%・女17%が家事で欠席している。こうしたことから、親への不満(T.31)の第3~4位に「手伝いや、仕事をいつけすぎる」が挙げられることにもなると思われる。

3.2. アルバイト・きまった仕事

食堂や市場、百貨店などの『アルバイトや手伝い』をすることがあるかどうかを聞いたところ、T.21のように、「よくする」ものは男2%・女4%で少ないが、「時々する」ものを合せると全体の15~17%になる。

また、新聞や牛乳配達などの『きまった仕事をしたことがあるかどうかは(T.22)、小学生では12%、中学生では20%強のものが経験しており、小学生2.6%・中学生7.7%のものが「今もしている」と答えている。

今回のこの資料だけでは、これ以上に子供たちの「アルバイト」や『きまった仕事』の実態を知ることができない。年少労働者の中の約 $\frac{1}{5}$ をしめるといわれる「義務教育を受けている生徒で就学している者」が、この地区ではどのような形で存在するかは、また別の角度からの調査・検討を要する問題であろう。

(飯塚 進)

(3) 地域社会を中心とした生活

1. 子どもとあいりん地区：あいりん地区の性格は、ドヤと呼ばれる簡易宿泊所居住の単身労働者を中心とした労働者の町、すなわち、貧困者の吹きだまりである不良住宅密集地区としてのスラムとは異質なドヤ街で、人口構成も単身労働者の割合が非常に多くて、子どもの割合はむしろ少ない。面積0.7万平方メートルのあいりん地区16町の総人口32,385人(40.国勢調査)、のうち5~9才人口は6.1%、10~14才人口は7.6%で(40.国勢調査)、未登録人口含む地区の推定人口を48,000人とすれば子どもの数は多いとはいえない。しかしあいりん地区内に居住している子どもは、小学校児童だけでも萩之茶屋、今宮、金塚三小学校通学児合計1,718人(44.4.現在)あって、全体の人口比から見て大きなウエイトは占めなくても、地域社会の重要な構成メンバーであることには変りはない。とくに子どもにとってあいりん地区が、生活の場であり、また人格形成の場であるという点に重要な意味がある。かれらは一時的に流入してまた去っていく通過人口ではない。ほとんどの子どもは入学以前からあいりん地区にとけこんでいる。来住時期を見ても、小学6年生で8割、中学2年生で全体の $\frac{2}{3}$ が小学校入学前からこの地域に住んでおり、最近3年間に他地域の学校から転校してきたものは全体を通じて約1割にすぎない(巻末 T.6および原資料参照)。

あいりん地域は、多数の子どもにとって幼少年期からの生育の地であり、また人格形成の場

でもある。よきにつけ、あしきにつけ、かれらにとってそこはふるさととしての意味を持つはずである。

2. 地域社会と家庭：とくにあいりん地区では地域社会が子どもにとって不十分な家庭条件をカバーすべき立場にあるといえる。欠損家庭や留守家庭が多いので、学校から帰っても放置されている子どもが約半数を超える（家族の項参照）。

夏休みでも父母と一緒に一度も遊びに行けないものが約半数もあり（T.24 参照）、また半数の家庭ではおやつを家で準備せず、子どもに直接買い食いさせており（T.16 参照）、さらに夕食も家族全部が揃って食べない家が多い（T.19） 子どもの買い食いや、外食に対して地域社会はその需要を充たすだけでなく、むしろそれを一層助長しているような雰囲気である。駄菓子屋、お好み焼屋などが密集して、街全体が子どもにとっては家庭の延長であり、極端にいうと自宅の茶の間になっている。

3. 近隣生活：狭小過密住宅の多いあいりん地区では、近隣はそのまま家庭の延長である。そこで近所のオジサン・オバサンと非常に親しくしている子どもは $\frac{1}{4}$ もあり、わり合い親しくしているもの $\frac{1}{2}$ を加えると、大半の子どもが近隣共同体形成の一要素になっている。人間関係が極めて稀薄であるといわれているDヤ街の中でも子どもは近隣社会に積極的に参加している。もっとも隣り近所のおとなたちと全く無縁で、近隣同志の面識もなく生活しているものが全体の20%あるのは、やはり地域の特殊性を反映しているように思われる（T.27 参照）。また近隣に友だちを持っていないものが約4割もあり、とくに中学生にその傾向が強い。（T.36 参照） 一般に中学生の段階では、子どもの友人関係も、近隣の範囲を超えている場合が多いのも当然であろうが、小学生の場合は少し異常である。もっとも近隣に友人がたくさんいると答えたものも約2割あり、子どもにとって近隣社会の持つ意味は決して軽くない。しかし他地域の調査と比較すると、近隣を中心とした友達のつきあいが非常に少ないのは問題で（科学教育センター調査参照）とくに小学生の場合顕著な差異を示しているがそれが地域社会の特殊な条件の反映によるものかどうか、今後の検討にまらたい。
4. 放課後と休日の生活：子どもと地域社会との結びつきを、放課後の生活を中心にして調べると（T.17 参照）、半数以上のは家庭の中にとじこもってしまい、そこでテレビを見たり（約3割）、勉強したり（約3割）、家の手伝いをしたり、また本を読んだりしている。家庭の外に出かけるものでも、そろばん塾や学習塾、などへ直行しているので（約5%）、戸外でスポーツなどするのは男女ともそれ程多くない（小学生で13%、中学生で6%、男女差はない。しかし両親健在の家庭にくらべて欠損家庭の子どもは、戸外でスポーツなど

する割合が2倍である。)

次に休日のすごしかたを聞くと(T.33参照)、やはり家庭でテレビを見たり、家族と雑談したりするものが4割、家で本を読んだり、工作、手芸をしたり、また家の手伝いなどするものが約2割ある。ところが家の近所で遊ぶものは非常に少なく、せいぜい学校を利用して遊ぶくらいである。しかし友だちとどこかへ出かけるといものが全体の半数近くもあり(T.28参照)、子どもはやはり家庭の枠を超えた地域社会の中で活動する傾向がある。

5. 子ども会活動：地域社会の中には、萩之茶屋校下を中心として萩之茶屋子ども会、山王町を中心として山王子ども会、山二こども会、みのりこども会、さらに各地区有志の自発的なサークル活動など、かなりの組織活動があって、他地域の現状と比較しても決して不十分なものではない。それぞれの地区の子どもたちの多くが、年何回かの活動に積極的に参加している(T.25参照)。常に町内会や子ども会の活動に参加しているものは、全体の $\frac{1}{6}$ たらずであるが、約半数の子どもは、地域社会の活動に多少とも関係している。もっとも地域社会の活動と全く無縁の子どもも約半数存在しているのは問題であろう。とくにははじめから子ども会活動などに期待をもっていないものが6割もある。あいりん地区では大きく分けて、家庭の状況にもよるのか約半数の子どもが自分の家庭の敷の中にとじこもり、残り約半数が、地域社会の諸活動に期待を持って参加しようとしているといえよう。

6. 問題点：今まで考えてきたようにあいりん地区においても、約半数の子どもにとっては、地域社会のありかたが非常に重要な意味を持っている。ところがあいりん地区の現状はとてまかれらの期待にこたえられない。交通、風紀など環境条件は最低で、運動場・遊園地の整備・充実は不十分なままに放置されている。この地域では、単身労働者が主役で、かれらの生活をみたく営業に重点が置かれ、子どもたちは隅っこに追いやられている。子どもたちの天国として用意された三つの児童公園(合計7347平方メートル)さえ心なきおとなたちの放縦な利用にまかされたままで、子どもがそれを充分活用できる現状ではない(§3参照)。また他地域にくらべてかなり多くの子どもの期待を充足しているそろばん塾や習字教室・学習塾なども、貧弱な民間投資だけに依存している現状であるから、公費による学習センターの設置、児童公園施設の整備拡充など地域社会のあり方をもつと子ども中心に再検討される必要がある。子どもたちの不満・要求を調べると、まず始めに出てくるのが、遊び場のないことに対する強い不満で、多くの子どもが共通に訴えている。(T.29参照) 実に小学生の男子4割、女子3割がこの不満をのべている。そこで子どもたちが大人にしてほしいこととして第一にあげるのが遊び場をつくることであり、ついでどこか遠くでも遊びにつれて行っ

てほしいという希望を出す(T.30参照)。ところが中学生ともなれば、適当に地域社会の外部の歓楽地などへ遠征をするものが多いためか(T.28参照)、近くにあそび場がないという不満を訴えるものの割合が減少する(T.29参照)。子どもは、近くに施設がなければ案外遠くまで出かける。地域から4km以上も離れた長居公園や2kmも離れたミナミの歓楽街へと、友達同志だけで、でかけるものがかかり多い。驚くべきことに、小学校低学年生でも、電車によって10数分かかる長居公園まで遊びに行くということである。往復20円の電車賃が安いせいもあるが、やはり徒歩圏内に遊び場を設置すべきであろう。

(土田 英雄)

(4) 余暇生活

筆者が昭和43年12月に大阪府下及び市内の中学2年生を対象に行った調査(以下調査1という)によれば、子どもの生活における余暇、消費活動のウエイトは非常に大きく、しかもそれは、親の学歴や、職業階層等、いわゆる家族背景因的なものと余り関係がなく、むしろ学校による差、つまり地域社会及び仲間集団の影響が強かった。この事をあいりん地区の子どもについて考えた場合、この地区の地域的環境及び、この地区の子どもの同輩集団ないしは遊戯グループが、彼等の余暇生活を、従って又生活全体をいかに規定するか、ひいてはそれが子どものパーソナリティ形成にいかにかゝるかは大きな問題と云えよう。

そこでまず、子ども達の学校から帰ってから寝るまでの主な生活時間について概観してみる。この詳しいことについては既に他の節において述べられているので、ここでは関連ある最小限にとどめるが、「きのう学校が終わってからばんごはんまで何をしたか」という問に対する回答(T.17)を見て最も目につく事は、中学生の場合「家の手伝い」が「テレビを見る」について多く、男子が15.1%、女子では26.6%に上っている。昭和41年6月に大阪府科学教育センターで行なわれた大阪市内の小中学校における調査(研究報告書第32号、以下調査IIという)では、二項目選択であるにかゝらず、男子中学生3.2%、女子中学生19.5%であるのに比べて著しく多いといえよう。更に同調査と比較すれば、あいりん地区では男子の屋外でのスポーツや遊びが少なく、女子では屋内での遊びや読書が著しく少ない。小学生の場合も「勉強」と答えたものが意外に多いのを除けば、略同じ傾向である。

こうした差異について、その理由を速断することは難かしいが、(1)他の節でも述べられているように、母親の就労率が60%と非常に高いこと。(2)アパートや間借りが約35.4%と非常

に多く(T.5)それも6帖1間以下が多いといった、とても屋内で遊べぬ様な住居事情であること。(3)この地域には児童公園が少なく、しかもそれすらじゅう分に使えない状態である(後節:観察調査参照)こと等が考えられよう。この事は後の休日の余暇活動を見る事によって一層はっきりするだろう。

なおこれと関連した事として、他地域(調査Ⅱ)では、「ふだん家に帰ってからつき合う友だちがいるか」との問に対し、ほとんどのいと答えたものが、小学生で約12%、中学生で23%であるのに対し、あいりん地区では、小学生が38.8%、中学生では43.9%が家の近所での友達がほとんどいないと答えている(T.36)。中学生の場合、通学区域が広い事、及び地域に関係しない特定の友達との結びつきが強まる事等から一般に小学生にくらべて、近隣での友達が少なくなる事は、当然考えられる事であるが、あいりん地区の場合、小中学生とも約4割前後が友達のいないことは注目に値しよう。あいりん地区の子どもが孤独であると、一般にいられていることが裏書きされているようである。今後の施策の一つとして、子どもが仲よく地域で遊べるような環境を作る事が大いに望まれる。

生活時間でもう一つ明らかな事は、就寝時間が他地域(調査Ⅱ)の子どもと大きく違うことである。小学生の場合、他の大阪市内地区で11時以降まで起きているものが、男子14.3%、女子7.0%であるのに、あいりん地区の小学生では、男子39.7%、女子36.5%が11時を過ぎてなお起きている。中学生の場合は、他地域でも11時台に就寝するものが最も多い(男子39.2%、女子52.3%)が、12時以降の就寝は、特に女子の場合他地域6.8%に対し、あいりん地区23.2%と非常な差異がある。(男子は余り差がなく、他地域17.8%あいりん地区18.7%)女子に差があるという事から考えて、恐らく母親の就労による家事手伝い等の影響と思われるが、このデータだけでは詳しくは分らない。今後更に追求すべき課題としたい。

休日の余暇活動

成人の場合、休日ないしは、休暇における余暇活動は、週日にはないくつろぎや、スポーツ、娯楽、あるいは旅行等かなり個性的なものがあ、最近ではいわゆるレジャーブームで、次第に各階層にも行きわたりつゝある。(社会福祉行政基礎調査報告 大阪府民生部 昭和44年参照) 子どもの場合、成人程でないにしても、やはり課業から解放され、まとまった余暇の時間がとれる日として、平日とは異なった活動のパターンが見られよう。そしてその中には子どもらの日頃抱いている興味や欲求や価値があらわれる。そうした意味で子ども達の休日の過ごし方(T.33)を見てみると、男女とも友達とどこかへ遊びに出かけるものが最も多く(男

46.0%、女41.6%)他地域(調査I)の子どもがテレビを見たり、家族と雑談するものが、圧倒的に多く(80~90%)、外へ遊びに出るものが、男子34.8%、女子20.9%であるのとはかなりの差がある。先に述べたように日頃、地域内において屋外で遊べない事の表われとみていこう。従って子ども達の行動範囲も広く、われわれが子ども達だけで遊びに行ったことのある所として調査表にあげた7箇所(天王寺公園、近鉄百貨店、新世界、住吉公園、ナンバ、千日前方面、長居公園、その他)のうち5ヶ所以上に行った事があるものが、男子では51.8%に達する(T.28)。なおその他の中で、大阪城、浜寺公園、大和川、股ヶ池公園等が多かったが、中には、京都、奈良、加太、二色の浜、金剛山、生駒山等かなり遠くまで子ども達だけで行っているものも数例づつある。他に比較出来るデータがないのではっきりした事は言えないが、海や山等、日頃の生活の中にはないものを求めている事、及びかなり行動範囲が広いといえるのではなからうか。たゞそれが親の放任によるものか、あるいは子ども達自身が物おじせず活動的であり、世なれている為なのかは分らない。今後更に追求すべき課題としたい。(なお、我々が調査をお願いした小学校の中の一校の先生の話によれば、その学校では股ヶ池公園(東住吉区)へ遊びに行く者が非常に多いとの事。理由として、小児運賃往復20円であり、日頃の小使いの範囲で、池あり、広場あり、遊興ありの広い公園で、一日思い切り遊べる事の魅力があげられていた。大いに参考にすべき事であろう。)

次に目につく事は、女子の場合、本を読んだり、工作や手芸等をする事と答えた者が、35.4%に上る事である。これも又、日頃はそうした事がほとんど行なわれない(5%程度)のと対照的である。家の手伝いが平日より著しく減っている(19.2%)ことをあわせて考えてみると、あいりん地区の子ども達の子どものらしい生活が休日において、やっと見出せるといった感じがするのである。

(野村哲也)

§ 3 戸外における遊びの実態観察

既に序においてふれたように、質問紙調査と平行して、愛隣地区内での子供の戸外における活動の実態観察を行った。紙数の関係でその全部について述べることは出来ないが、以下その中の代表的な地区について観察結果の一覧表とそれについてのまとめ、及び印象記をかゝげる。

1. 地点別遊戯実態一覧表(別掲)

2. 地点別特徴の概要

A、東萩町公園：この公園は一応あいりん地区では、四条ヶ辻公園と共に最も面積は広い方であるが、通称三角公園とも云われるように二方が宿街、一方が南海天王寺線に面し、特に夜など、南海線沿いの道は、婦人の一人歩きは危険だといわれる。公園というには余りに殺風景であり、労務者がいつも多勢集まっており、よっぽらいも何人かは居るといった状態で、とても子どもの遊ぶ環境ではない。しかし他に広場がないせいか、いつも小さな子どもがかなり遊んでいる。但し中学生はほとんど見かけない。労務者を敬遠するのか、他に遊ぶ場所があるのかはつきりは分らないが、何れにせよ、中学生位の年齢にとってこゝは遊ぶのに適当でないであろう。

B、萩本通り商店街

南海本線萩の茶屋駅から、阪堺線今池に至る通りで、電鉄利用者等も含めて人通りが一番多い。又、簡易宿街の中にある為、労務者が食事をしたり、商店で買物したりひやかしたりする所でもある。従って他から遊びに来る子どもは余りみかけないが、商店街の子どもは夜遅くまで店先等で遊んでいる。

C、西成警察裏、海道公園

こゝは東萩公園程労務者がたむろしていない。むしろ貧しい年寄りが1人か2人づつ所在なく坐っている事が多い。遊具は多少あるが、公園というよりは、空地といった感じで、周囲に露店商が店を出したり、隅にゴミや廃品が捨てられたり、物が置かれたりしている。こんな所でも遊ばざるを得ないというのがこの地区の特徴といえよう。他の地域ならとても公園とは云えない所である。

D、東・西入船、海道、甲岸の各町の路上では殆んど遊んでいる子どもを見かけない。小中学校の下校時に道草をくっている子どもを見る程度で、子どもはもとより、おとなを含めて人通りそのものが少ない。特に最近では高層の簡易宿がふえ、しかもそれらが小個室を主体とし室料もかなり高くなって、いわゆるスラムというよりは単身の労務者の基地という性格が強くなり、

子どものある貧しい世帯持ちがこの地区から減ったためではないかと思われる。たゞそれが何らかの社会福祉の施設等に移るとか、家族としての生活をするにふさわしい家に移っているのなら、今までのように労務者層の中へ子どもが混在するといったような子どもの生育に不適な形であるよりもいゝだろう。しかしそうでなくて、室料その他の関係でこゝに居れなくなり、より劣悪な条件の中に放り出されたとすれば問題であろう。今後更に追求すべき課題である。なお萩の茶屋小塚校横の小公園は比較的新しく作られ、小ざれいであり、遊具も比較的整っている為割合子どもが遊んでいるし、保護者のようなおとなが居ることも多い。あいりん地区ではもっとも小遊園の機能を果している所といえよう。

E、山王町二・三丁目路上

この地区での主な通りは、市設山王住宅及びみどり園の前を東西に走る通りと、山王市場通り、新開筋商店街及び南北に走る飛田本通り、及び北門通りである。この地区は、東西入船を中心とした簡易宿街とはかなり異った様相を示している。簡易宿もあるが、どちらかと言えばアパート風のもが多く、その他は上に述べた大通りに面した商店及びそれ等の間にある露地裏風の通りにある小住宅である。従って子どもの数も多く、近くに広場がないせいもあって道路や露路で遊ぶものが非常に多い。遊び道具は、ラムネ、ベッタン、コマから、ゴム飛び、紙飛行機、バレーボール、サッカーボールと東萩公園や、海道公園で遊んでいる子どもに比べて種類も多く、数も多い。たゞ路上である為じゅう分に遊べないし、車の通る主要な通りでは、非常に危険である。市内の他の地域ならとても遊べないような路上でも遊ばざるを得ないといった印象を受ける。なお又、他の地区と同様こゝでも遊んでいるのは幼児と小学生が主であって中学生は非常に少ない。別の所でも述べたように、中学生位になると他の地域にある大きな公園や広場等へ（主として土曜の午後や日曜日）出かけるようである。しかしこの事は一步誤まれば歓楽街へ出かけるということになる危険性もあり、やはり地区内に十分な広場や遊戯施設を設ける事が必要であろう。

なお山王市設住宅の横にみどり園という、80~100 m^2 位の小さな遊び場がある。金あみを張りめぐらしたりして物物しいが、幼児にとっては安全に遊べるかけがえのない所であるらしく、いつも20~30人が遊んでいる。母親らしい保護者も大抵2~3人おり、小さいながらもまとまった遊び場といえよう。

F、ニュー世界トルコ観光附近

こゝは、山王町四丁目の旧赤線区域内の道路であるが、東端が行きどまりのような形になっており、車や人の通行も少なく、又道幅も割合広い為、子どものよい遊び場になって、自転車

実 験 遊 戯 別 点 地 一 覧 表

場 所	日 時	11月29日1時~3時 晴 暖	12月1日 3時~5時 晴 暖	12月2日 3時~5時 晴 暖	12月3日 3時~5時 晴 寒	12月5日 3時~5時 晴 暖	12月6日2.30分~4.30分 晴 寒	12月12日3時~5時 曇 寒	12月14日10時~12時 晴 寒	12月14日2.30分~4.30分 晴 寒
東 菰 町 公 園	年 令 ・ 人 数	A 30~35人	A 35人 B 4人	A 27人	A 18人	A 23人	A18人 B10~15人 C 3人	A 31人 C 3人	A19人 B 5人 C 8人	A18人 B9人 C 10~14人
	遊 戯 内 容	砂遊び、ラムネ、 プラブラ	かけっこ、ラムネ、 砂遊び、野球、 投げ矢	ジャングルジム、ブランコ 三輪車、砂場遊 廃棄ベッドの上で遊ぶ プラブラ	ボール投げ、 なわとび ブランコ、スベリ台 プラブラ	シーソー、ブランコ ボクシングのまね スベリ台 徘徊	ラムネ泥遊び ブランコ、シーソー プラブラ 野球	ヒコーキとばし シーソー ラムネ 徘徊	ラムネ、野 球 チャンバラ 徘徊 バレーボール	ラムネ、シーソー かけまわる ボールけり 野 球
	附 近 の 状 況 (特に成人)	労務者70人 酒気帯び1	労務者50人	労務者50人 たき火(2ヶ所)	労務者10人 たき火	労務者60人 たき火、立話、新聞 よみ、たばこを吸う	労務者70人 何となく集まる	労務者32人 2ヶ所たき火	労務者15人 たき火	労務者20人 たき火2ヶ所
警 察 裏 海 道 公 園	年 令 ・ 人 数	A 9人	A 9人	A 7人	0 人	A 11人 B1人	A 7人	A 5人 B 10人	A 2人	A 2人
	遊 戯 内 容	鉄 棒 砂遊び 柵の上を渡る	すべり台 ブランコ	プラブラ すべり台 1人 ソロバン 練習		すべり台 バレーボール ブランコ 徘徊	プラブラ バレーボール キャッチボール	ブランコ ものを食べながら 立ち話	立ち話	砂遊び
	附 近 の 状 況 (特に成人)	保護者1人 労務者5~6人 酒気帯び	労務者20人 露店数軒ひやかし 歩き、たき火2ヶ所	酒気帯びた1人 ソロバン練習の子に 話しかける	労務者13人 たき火	酒気帯び3人寝る 労務者4人立話 保護者1人	保護者1人 労務者10人 ごろ寝酒気帯び	労務者2~3人	保護者1人	浮浪者1~2人
菰 の 茶 屋 小 学 校 横 遊 園 地	年 令 ・ 人 数	A 30人	A15人 B5人	A 8人	A 17人	A 15人	A23人 B 7人	A 23人	A13人 B 3人	A12人 AB 6人 B 8人
	遊 戯 内 容	すべり台 砂遊び ブランコ	ジャングル、ボール投 たわむれ、ブランコ 話、ソフトボール	野 球 プラブラ	ブランコ すべり台 ボール投 ジャングル	ブランコ、砂場 すべり台 鉄 棒 徘徊	ブランコ 鉄 棒 ラムネ プーメラン	ブランコ 鉄 棒 ラムネ プーメラン	ラムネ ブランコ	ラムネ シーソー プラブラ
	附 近 の 状 況 (特に成人)	保護者1人 労務者5~6人 (公園内)	保護者1人	酒気帯び1人	特になし	酒気帯び1人ごろ 寝	保護者1人 労務者3人	労務者5名雑談	特になし	労務者2~3人
ニ ュ ー 世 界 ト ル コ 観 光 附 近 (山王町四丁目)	年 令 ・ 人 数	A 10人	B 13人		A 14人	A 7人 B 4人	A 13人 B 6人 C 2人	A 15人	A 8人	
	遊 戯 内 容	キ ャ ッ チ ボ ー ル	野 球		徘徊、ブランコ 自転車乗り たわむれボール投 げ	野球、徘徊 自転車で徘徊	バレーボール テニスボールまね プラブラ	徘徊	三輪車 自転車 徘徊	
	附 近 の 状 況 (特に成人)	普 通								
山 王 町 二 ・ 三 丁 目 附 近 路 上	年 令 ・ 人 数	A 3人 B 29人	A21人 B 14人	A 7人 AB16人 B 15人	A 41人	A 22人	A 33人 B 37人 C 9人	A 25人	A 20~25人 B 4~5人	A10~15人 AB5~6人 B 5~6人
	遊 戯 内 容	なわ飛び ゴム飛び	ゴム飛び プラブラ	立ち食い、徘徊、 バレーボール ベッタン、コマ、戯れ ヒコーキとばし	徘徊、プーメラン バレーボール遊び 三輪車、立ち話	ゴム飛び 買い喰い 立ち話 徘徊	ゴム飛び、鬼ゴッコ こままわし ままごと ボールあて	三輪車、立ち話 ゴム飛び、徘徊、 買い喰い	徘徊 買い喰い	ベッタン、プラブラ たこ焼を食べる 路上で野球
	附 近 の 状 況 (特に成人)	比較的通行人多し 主婦が大部分	全 左	全 左	全 左	全 左	全 左	全 左	全 左	全 左

(注) 年令区分 A : 小学校低学年以下 B : 小学校高学年 C : 中学生 D : 高校生以上

遊び、野球、バレーボール等、少し広い場所のいる遊びが行なわれている。いわば公園の代用品的存在で、周囲には住居がないわけであるから子ども達は他から広場を求めてやって来るのであって、少しでも遊ぶに適した所があればやはり子ども達は集まる。こうした欲求ないしは必要性の強さというものが、こゝによくあらわれているようである。」

3. 観察の印象

11月28日(金) 18時～20時

阪堺線今池駅から萩の茶屋までの萩本通りは、帰宅時のせいもあって勤め人風の通行者が多く、子どもの姿は余り見かけない。南海本線沿いに萩の茶屋駅東側ガード下の通りは、丁度労働者が食事や風呂に出かける所らしく、サンダルをはき手ぬぐいをぶらさげた人達がかなり雑踏している。たゞ少し北になると急に人通りが少なくなり、街灯もなく、一人歩きにはやゝ気持が悪い。警察裏の海道公園附近には露天商が数軒、古道具、衣類、風俗雑誌等売っているが、こゝでも子供は余り見かけない。飛田本通り及びその東西の裏通りも子どもは余りいない。旧遊郭北門から尼崎平野線までのいわゆる北門通りは丁度この日が夜店で、非常に賑わっていた。夜店は普通夏のものと思っただけにやゝ驚いた。こゝには子ども、特に中学生が非常に多く、延二三百人はいたと思われる。小学生以下の子どもは、ゲームをしたり、低額のおもちゃを買ったりしていたが、中学生は大部分、屋台の立ち食いをし、数人ないし十数人集まって立ち話をしていた。全体的な印象では、中学生にとって一種の社交場のようで、雑談しながら通りを行ったり来たりブラブラしているといった感じである。なおこゝで集まった中学生達は、その後グループ毎に裏通りで又30分～1時間位立ち話をしたりふざけあったりしている。

12月1日(月) 3時半～5時半 晴 暖

東萩町公園： 小学校低学年のこどもが約40人、鬼ごっこのような遊びやラマネ遊び、砂遊び等、割合活発に遊んでいた。しかし東北隅には、酔っぱらいが寝ており、近くで労働者が数人たき火をして雑談しており、その中に子どもも数人交っていた。北西隅には労働者約40人が集まって話をしているなど、余り遊ぶのによい環境ではない。中学生は全く見かけない。

萩の茶屋小学校裏の公園： 割合きれいな遊戯具(ジャングルジム、ブランコ等)があるせいか、それを利用して遊んでいる子ども(小学生)が割合多い。(約20人)その他、ボール投げ、ソフトボール等をしている者もあり、又、保護者らしい人も1人それを見守っているなど、簡易宿街にありながら、比較的児童遊園らしい雰囲気である。

今宮中学横： 四条ヶ辻公園： 南海本線のガードによって、いわゆる簡易宿街と隔てられて

地区略図



- ① 西成市民館
- ② あいりん保育園
- ③ 済生会今宮診療所
- ④ 西成警察署
- ⑤ 大阪港労働公共職業安定所西成出張所
- ⑥ 西成消防署海道出張所
- ⑦ 今池生活館
- ⑧ 今池生活館保育所
- ⑨ 愛隣会館
- ⑩ 愛隣会館保育所
- ⑪ 西成保健所
愛隣会館分室
- ⑫ あいりん小・中学校
- ⑬ 東田保育所
- ⑭ 愛隣寮
- ⑮ 馬淵生活館
- ⑯ 馬淵生活館保育所
- ⑰ 西成労働福祉センター
- ⑱ 今宮住宅

全線は小学校区
山松中

未線は小学校区
青線は中学校区

昭和 45 年 3 月 30 日 印刷発行

発行所 大阪市民生局
大阪市北区中之島 1-4

編集者 関西都市社会学研究会
大阪市西成区東田町 7 3 の 1
愛隣会館内

印刷所 三進社
大阪市北区葉村町 1 番地
(371) 2551

大阪市民生局
寄贈之記

[250]